

苫東・和みの森運営協議会(苫小牧市)

## 「森のコミュニティセンター」としての森づくり活動 (森林資源利用タイプ活動報告)



報告者/  
小川真由美さん

小川 皆さんこんにちは。苫東和みの森運営協議会の小川と申します。「森のコミュニティセンター」としての森づくり活動として、交付金の「森林資源利用タイプ」の事例についてお話します。その前に、和みの森について少しお話させていただきます。苫東和みの森は、2007年6月第58回全国植樹祭が開催された場所で、天皇陛下をはじめとする約1万人の方々が集い、植樹をしました。この植樹祭の跡地の空間を生かし、人と人、人と自然が交わり森づくりの意義を未来に伝えることはできないだろうか、という思いを土台にして、様々な人が集まり森を舞台に活動を広め、いずれ森が形作られるのを手助けする、人も森も動物もコラボレートする、そんな空間が出来たら素敵ではないかと考え、和みの森と名付けました。こうした思いを具体化するために、森のコミュニティセンターを作り運営し、幼児やお年寄り、体が不自由な人など様々な人が参加できる活動をしています。

具体的な活動は、「空間利用タイプ」の話にもなりますが、毎月1度、地元市民や森林ボランティアが集まり、森づくり活動を進めています。また、森のようちえんなどの活動をしています。主体は小さなお子様連れの家族が多く、和みの森の活動を支えています。最近では、イオンチアーズクラブや、近隣の町内会の団体、宿泊研修の中学校が3校来しました。

JICAの研修生など、国を越えた人々が森づくり活動に参加しています。その他、バリアフリーな森づくり活動を進めていくにあたり、写真にある(写真1)車いすでも森に入れる様に木道造りを進めています。また、和みの森では地産地消循環型エネルギーの育樹システムの構築を目指して、「和みの森ありがとうチケットプロジェクト」とし、地元の銭湯と協働しています。まず森づくりで作られた薪をトラックに積み込み、地元の銭湯は薪を無料で受け取り、銭湯からは入浴券をもらい、薪づくりをした人に配ります。

具体的な交付金の利用は、活動の主体が家族連れ、幼児やお年寄りが多ので、薪割りにまさかりを使うのは、危ない場合があります。交付金の資機材購入を利用し、油圧式薪割り機「剛腕君」を購入しました。この薪割り機だと、幼児でも太い薪を簡単に割ることが出来るので、列が出来るほどの人気です。子ども達は、森づくりに参加しているというよりも、遊びの一環として薪づくりをするので、今年度は薪を沢山作ることが出来ました。

それから、今年は「チップパー」を導入しました。こちらも資機材購入を利用して導入しました。和みの森ではバリバリ君という愛称で親しまれ、森づくり活動の時に、森に落ちている小枝を拾って木材チップに加工しています。このように、資機材を導入したことにより、小さな子供でも立派な働き手、森づくりの担い手になることが出来る環境を整えることが出来ました。和みの森は、森づくりに深く関わっているプロフェッショナルはいませんが、若い世代や子どもが森づくりに関わる事が出来る道具の導入によって、森づくりの関心層の裾野を広げる事が出来たのではないかと思います。

「森林資源利用タイプ」の交付金の活用例として、昨年度から馬搬による森林整備活動を進めています。馬搬は重機を使わないので作業道の造設の際に、林床や立木を傷つけることがなく、馬の力を利



写真 1

用して安全に木を森から運び出せる技術となっています。大きな木を処理するために専門的な技術が必要なので、株式会社流山ファームさんに業務委託をして、馬搬による森林整備活動を進めています。馬搬により搬出された木は、薪や丸太に加工し、銭湯に持って行ったり、木道造りに利用しています。今年度新たに、ウッドネット北海道苫小牧支部と業務委託して作業道の整備・補修を進めています。また、市民やボランティアが安全に作業できるように刈払作業や、幅1メートル深さ80センチ程の溝が森の中にあるのでそこを埋めて作業道を整備して頂いています。

このような交付金を活用した活動は、昨年度は馬搬がメディアに取り上げられたり、幼稚園の時から森づくり活動に参加している男の子がユネスコ主催のESDで和みの森銭湯ありがとうチケットプロジェクトのプレゼンテーションをして環境大臣賞を頂いたり、和みの森の活動を紹介される場面が大変増えて参りました。さらに、宿泊研修で来た学校の先生の口コミなどから、森づくり活動に参加したいという学校もあります。

森づくり賛同者が増えていますが、基本的には、和みの森は会員による森づくり活動をベースとしています。多くの声がかかり大変嬉しいのですが、人が来

すぎてしまうのではという問題が起きています。来て下さる方の声に応えるためにも、コーディネート・マネジメントする能力が必要となっています。そのための人材育成や若いボランティアのスキルアップなど、人を育てることが重要な課題となっています。森づくりを継続的に進めていくためにも、重要だと考えています。



写真 2